

Edgar Allan ポオ肖像写真の「左右問題」

中 崎 昌 雄

は じ め に

私は先ごろ「咸臨丸の福澤諭吉と写真屋の娘—ダゲレオタイプとアンブ
ロタイプ」という論考¹⁾を発表した。

この中で私は「福翁自伝」の諭吉らしい愉快的挿話で有名になっている
この写真が、一般に信じられているようなダゲレオタイプ（銀板写真）で
なく、万延元年（1860）遣米使節の時代に一時米国で流行したアンブ
ロタイプであることを説明した。そして同時に「写真屋の娘」は、このころ桑
港で開業していた写真家 William Shew の一人娘 Theodora Alice（愛称
ドーラ）であることも推定しておいた。

このような私の古写真への関心は、昭和 54 年 4 月「人類の恩人—ルイ・
パストゥール」展（日本医師会、内藤記念科学振興財団共催）の手伝いを
したことから始まっている。

フランスに行く用事がある、そのついでにパストゥール研究所に寄っ
て展示品の相談をしてくれるように依頼を受けたのである。

帰国してのち、すでに開催されていた東京の会場で、パストゥール博物
館から送られてきたパネルを見ていて、一枚だけ奇妙な印象を受けるもの
があるのに気がついた。それはパストゥール、24-5 歳のころの若わか
しい²⁾肖像である。

そのころの彼は、高等師範学校（エコール・ノルマル、École normale
supérieure）の学生で、博士論文の仕事をしていた。そして自分の生涯の
仕事の方角を決めてしまう大きな発見をする。ブドウ酸が実は天然系の右
の酒石酸と、非天然系の左の酒石酸の混合物であることを発見したのであ

る。こうして分子の世界にも、右のものと左のものがあることが判った。

この発見が契機となって、パストゥールは生命—非対称 (dissymétrie) というテーゼに導かれ、これがやがては彼の微生物発酵、生命自然発生説検討、微生物病の研究などという生命科学の業績につながっていく。

さて問題の写真であるが、気になったので家に帰ってから、彼の「書簡集」の中で覚えている、この写真を探してみた。写真は「書簡集」第一巻巻頭の口絵³⁾になっていた。しかし「パストゥール展」のパネル肖像とは鏡像同士になっている。この時分の写真は、まだ銀板写真で鏡像に写る。これをそのまま正直に銅板画にしたものが、この書簡集の口絵であった。原画のときから左右反対になっていたことは、版画家 C. Lebyle の署名が正像で読めることから明瞭である。

私が奇妙に感じた「パストゥール展」のパネル肖像は、この原画をさらに左右逆転して焼き付けて、パストゥールの「正像」になおして展示していたことになる。親切といえは親切であるが正確ではない。

中京大学「教養論叢」の前号 (第 26 巻, 第 4 号⁴⁾) に私は「E. A. ポオ『Hans Pfaall』, R. A. ロック『The Moon Hoax』と, F. ヴェーラー戯文『酒精発酵の謎とけたり』」を書いた。このとき調べた、いろいろなポオ資料の中のポオ肖像写真にも、これと同じような左右逆転現象のおこっているのに気が付いた。

ポオのころは、まだ銀板写真の時代であるから、似たようなことが発生しているのは当然といえは当然といえよう。

1. 銀板写真の発明者ダゲールと電信機の発明者モース

ポオ肖像写真の「左右問題」を説明するのに「モールス信号」で知られている電信機の発明家 S. F. モース (Samuel Finley Morse, 1791–1872) の話から始めるのには訳がある。それは米国にダゲールの銀板写真を最初に伝えたのが彼だったからである。

L. J. M. ダゲール (Louis Jacques Mandé Daguerre, 1787–1851)⁵⁾ は写真にとりつかれる 1824 年 (37 歳) のころ、すでにパリでは有名人であっ

た。サン・マルタン門近くの彼のジオラマ劇場は、その真に迫ったパノラマの臨場感でパリ中の人気をさらっていたのである。⁶⁾

谷だと思って銅貨をほり込んだ観客の一人は、それが跳ね返って来たのに驚いた。溪谷だと見えたのは単なるカンバス画布だったからである。

この「写真」のような風景を描くために暗箱写生器 (camera obscura) を使用したことが、ダゲールが写真の研究を始めた理由だといわれている。カメラ・オブスキュラは昔からある風景写生の装置で、いろんな種類があるが原理的にはカメラのピントガラスのところに紙を置いて、そこに映る風景を鉛筆でなぞるものと考えたらよい。

ダゲールの写真研究は、光学も化学も知らない素人には大変だったと想像される。なまじその限界を知らない素人だったからこそ、我武者らに試みることが出来たとも言えるだろう。そうこうしている内に、南仏シャロン (Châlon) で同じようなことを研究していたニセフォール・ニエプス (Nicéphore Niépce, 1765-1833)⁷⁾ と共同研究をすることになった。

契約を結んだころ 1828 年、ダゲールは 41 歳だったし、ニエプスの方はもう 63 歳になっていた。この時点でニエプスの方は、アスファルトを油と練ったものが光で硬化する性質を利用したヘリオグラフ (heliograph) を完成している。化学的にはダゲールの数歩先きを歩んでいたのである。

そして次の年、ジオラマ劇場の経営は悪化しダゲールは窮地に立つことになった。

しかし苦労が実って、ニエプスが死亡するころ (1833 年 7 月) には、ダゲールも銀板を利用する新しい方向に活路を見出していた。そして 1835 年になると有名な水銀蒸気を利用する現像法を発見し、永かった模索の闇の中にもやっと曙光が見えて来た。陽画を眼で見ることが出来るようになったのである。あとは感光剤のヨウ化銀を不活性化して、これ以上は感光しないようにする操作 (定着) だけである。これも濃食塩水で洗うことでなんとか解決した。⁸⁾

死んだニセフォールの後は息子のイシドール (Isidore) が継いでいたがニセフォール亡きあとほとんど独力で銀板写真を開拓したダゲールにとっ

て、自分に有利な契約をイシドールに押しつけることは訳もないことであつた。発明の名義人はダゲールのものとなり、彼の開発した写真術を自分でダゲレオタイプ (daguerreotype) と命名した。

残る問題は、この発明をいかに金にするかである。

このころダゲールはパリの市街を撮りまくり、その美しく精緻な銀板原板を人に見せて、処法公開の予約募集 (一口 1,000 フラン) をしていた。しかし 400 人予定のところ募集に応じたのは、数人だけという失望を味わされる結果となる。

物理学者で当時パリ天文台長だったアラゴー (D. F. J. Arago) の知己を得て、フランス政府にその特許を買い取って貰う交渉が進み始めたのは、そのころである。アラゴーは 1839 年 1 月 7 日に学士院でダゲレオタイプの紹介をする。しかし、これは事前に漏れて一日前の 1 月 6 日「*Gazette de France*」のスクープするところになってしまった。アラゴーの報告では露出は真夏の陽光の下で 8-10 分とされている。フランス政府が特許と引き換えに年金を支給する案がまとまり、内務大臣 Duchâtel が仲に入って調査委員会が組織される運びになった。

電信機の特許のことで、前年からパリに滞在していたモースがダゲールを訪問したのは、ちょうどこの頃である。

1839 年 3 月 7 日 (木曜日) モースはジオラマ劇場の隣の建物の六階のアトリエにダゲールを訪ねた。ダゲールは宣伝にもなるし、お返しに電信機の実演をして貰えるというので、モースの来訪を歓迎したのである。

この訪問の様子を次の次の日、3 月 9 日に米国の弟に手紙で知らせた。

これが 4 月 20 日の紐育「*Observer*」紙に掲載されたので、われわれはその時の模様を知ることができる。この頃、定期船は大西洋横断だけで 15 日から 17 日かかった。手紙の前文でモースは 10 年もまえ New Haven にいた時の暗箱写生器で試みた自分の写真研究のことを回想している。それにしても、実見したダゲールの銀板写真は衝撃的であつた。これは当時、銀板写真を見たすべての人に共通した反応である。いわば写真に囲まれて生活しているわれわれ現代人でも、これは少し想像力を働かすだけで共感で

きる感動ではないだろうか。

もともと自身が肖像画家であったモースには余計に印象が強かったのであろう。画家 Delarache のつぶやいという言葉は、彼のすべての画業よりも永く記憶されることになった。「この日から絵画は死んだ」⁹⁾

次にモースの手紙の一節を紹介してみよう。¹⁰⁾

「描写の細密さは想像を絶しています。市街の図がそうです。遠くに広告が見えますが、ただ字が書いてあると判るだけです。肉眼では読めません。ところが50倍の拡大鏡のたすけを借りると、どの字も明瞭に読むことができます。建物の壁の微細な割目もそのとおりです。」

すべては Rembrandt の完璧さである。ただ露出が長いので動くものは撮れない。靴を磨かしている人も写っているのは靴と脚だけで、頭も胴体もない。

次の日、3月8日の昼時に今度はダゲールがモースの電信機を見にやって来た。発信機と受信機を別の部屋において通信してみせたのである。

ちょうどその頃にダゲールのジオラマ劇場が燃えていた。隣りのアパートにあった彼のアトリエはなんとか無事で、銀板写真の資料が焼けずに残ったのがせめてもの慰めであった。

政府との交渉は、しかしこの惨事のために早くなり、下院と上院での説明会を経て王の署名がとれ、法律として成立したのは8月7日になった。ダゲールにとって15年の歳月が流れていたのである。この時のフランス王は7月革命(1830年)で擁立されたルイ・フィリップ(Louis Philippe)であった。

政府との契約に従って銀板写真処法の公表が行われたのは、これから12日あとの8月19日で、ダゲール、イシドール立会いのもとにアラゴーが説明の役に当った。3時からだというのに正午には満員で、入れない多くの人びとはセーヌ川左岸の会場 Mazarin 学院の建物を取り巻いた。

残念なことに、この時のアラゴーの説明は難解で人びとを失望させた。

しかし数日の内に処法の詳細を説明した79頁の小冊子「Historique et Description de Procédés du Daguerreotype et du Diorama」(「ダケレオタイプとジオラマの歴史および説明」)(パリ, 1839年8月21日刊)が市場に出て人びとは始めてその全容を知ることができた。そしてダゲール自身も講習会を開いて教えたりした。

こうして全パリ市民は「Daguerreotypomanie」に取り憑かれ、人びとは争って眼鏡屋にレンズを求め、薬局で薬品を買い占めたのである。「Historique」は、この年1839年の末までに10数版を重ね、英国でも3種類の英訳が刊行された。また同じ年にドイツ、スウェーデン、ロシア、イタリア、スペイン訳が出て、次の年にはハンガリー、ポーランド語の翻訳まで揃うことになった。空前の世界の大ベストセラーである。¹¹⁾

2. モースと米国の初期銀板写真

モースは牧師の子で、父は息子が絵の方に進むことに賛成ではなかったという。¹²⁾

しかし、そのころ描いた二枚の絵が、W. Allston の認めるところとなり、父も折れて1811-1815年ロンドンで修業した。ところがアメリカに帰って来ても得意の歴史画では食って行けず結局、肖像画家になって稼ぐ以外はなかった。

1818年に結婚し1823年に紐育にスタジオを構えた。このころ「American Academy of Fine Arts」に反抗して、自分で「National Academy of Design」を設立して会長となり、この職には電信機の方が忙しくなる1842年までついていた。

1825年は妻の死、次の年に父の死と不幸が重なり、1828年にはモースがその強い性格を受けた母も死んでしまった。こんなことから、1829年ヨーロッパに旅立ち3年間フランスやイタリアで暮している。不遇の時代が続くのである。

1832年に帰国するが、そのとき乗った定期船「Sulley」号上でC. T. Jacksonに会い電磁石のことを聞いたのが契機となって、電信機の考案に

打ち込むことになった。¹³⁾ この時モースはもう 41 歳になっていた。

これからの五年間は画家モースから発明家モースへの転換期である。

帰国して紐育市立大学の絵画彫刻の教授に就任したが、これは名前だけで給料は支給されず、生徒からの月謝も大学の部屋代を払うのに足りなかったという。

物理や機械には全くの素人であったが、持ち前の交際の広さから次第に協力者を獲得するのに成功し、やがて画期的なアイディア「リレー機」を思い付いた。「モールス信号」が形を整えたのもこの頃である。

そして 1837 年 9 月には米国特許を申請し、英国特許のことで大陸に渡った。しかし、これには成功せず、1838 年にパリに来て仏国特許を取る工作をした。これも、やはりうまく行かなかった。厭気がさしていたころダゲールに会ったのである。

アラゴの公開講演のあった 1839 年 8 月には紐育に帰っている。そして写真で一儲けしようと実験を始めた。彼はダゲールに「Historique」を入手したことを告げる手紙を書いている。「私が持っているのは、あなたの処法を公開した小冊子の中で、アメリカで開かれた最初のものです」¹⁴⁾

しかし米国で最初の銀板写真に成功したのは、彼ではなく紐育在のイギリス人 D. W. Seager で、1839 年 9 月 16 日ということになっている。「Historique」の発売から 1 ヶ月も経っていない。

モースの方は大学の 3 階の部屋から向いの教会を撮ったのが 9 月 28 日で、この時のカメラは電信機の製作をしてくれている G. W. Prosch が作ってくれた。しかし余り満足に行く写真でなかったことはダゲールへの手紙からもわかる。露出は 15 分だったという。屋上で娘や友人の写真撮影も試みている。長い露出だから始めから眼を閉じていた。

同じ紐育市立大学には著名な化学者 J. W. ドレーパー (J. W. Draper)¹⁵⁾ がいる。彼はイギリス生まれで移民で来たのであるが、この頃すでに光化学に興味をもって臭化銀などの光に対する感光性の研究をしていた。

ダゲールやモースの試みを聞いて関心を持ったのは当然といえよう。⁵¹⁾

彼も同じように 9 月の末には向いのユニタリアン教会の銀板写真を撮っ

ている。

しかし、この当時の写真はどれも現存していない。

年が明けて 1840 年 3 月になると、紐育 52 番街に世界最初の肖像写真館が開業した。カメラはレンズでなく直径 17 cm の金属製凹面鏡を使った A. S. ウォルコット (A. S. Wollcott) の発案になるものだった。収差が無く明るいので露出は 3-4 分で良かったし、左右正像がとれるのが利点であった。ただ画面はたかだか 2×2 cm 程度のものしか撮れない。

モースはこのウォルコットに共同経営を持ち掛けたが断られている。

ドレーパーの方はというと妹 Dorothy Catherine の肖像写真¹⁶⁾に成功している。

彼はすでにヨウ素に臭素を加えて銀板の感光性を上げているから、薄雲のあったという屋上での露出は 65 秒と短かくて済んだ。写真では Dorothy は眼を開けている。

モースはドレーパーを肖像写真の事業に引き込んで、大学の屋上にガラス張りのスタジオを作った。モースが著名な肖像画家だったから、かなりの人が集って来た。1 枚 4 ドルで露出はスタジオ内で 40 秒-2 分だったという。

共同事業は 1840 年 4 月からだが、この年の暮にはドレーパーは手を引いてしまった。

この時分から 1844 年までがモースの一番苦しいときで、借金するのを嫌ったから飢に苦しめられることまであったという。おまけに妻に死なれ 4 人の子供を抱えている。

写真屋も太陽が頼りの商売であるから、曇りの日は営業できない。それで金を取って写真術を人に教えることを始めた。1 コースで 25-50 ドルというから高額である。それでも、この時の弟子から後で写真家として名をなした アンソニー (E. Anthony)、ブレイディ (M. B. Brady)、A. S. Southworth などが出た。「福沢諭吉と写真屋の娘」を撮った W. ショウ (William Shew)¹⁷⁾ もその一人である。

こうしている内に、モースの発明にも陽が当ることになった。1844 年議

会がワシントン-ボルチモア間の電信架設に3万ドルの予算をくれたからである。そして1844年5月24日に有名な言葉が電線に乗ってワシントンからボルチモアに送られた。「What hath God wrought」

同じ電文が瞬時にボルチモアから打ち返されて来た。

3. ブレイディ写真館のポオ肖像写真

Mathew B. ブレイディ (1823-1896)¹⁸⁾ はモースより32歳も年下である。彼の名前の「B」は「for effect」につけたもので、彼自身を含めて誰もその意味を知るものがない。¹⁹⁾

15歳のときSaratoga Springで画家のW. Pageと会い、画才を認められて、その紹介で紐育に出て来てモースに師事することになった。これが18歳、1841年のことで、3年もすると勤めていたStewart商会を辞めて自分の写真館を開いた。モースの電信機が脚光を浴び始めたころである。

僅か21歳の時であるから時代とはいえ、やはり商才にたけていたというべきであろう。それも場所はBroadway-Fultonの角で「Brady's Daguerrian Miniature」の看板をかけた。紐育でも目拔きの場所である。周りには一流の商店やレストランが密集していた。

そして筋向いには悪名高い「Barnum's Museum」²⁰⁾があった。バーナムは有名な興行師で「大衆はだまされることを好むものだ」²¹⁾という哲学のもとに、いろんな「hoax」を次ぎ次ぎと展示して紐育ッ子を驚かせていた。例の「The Moon Hoax」(1835年8月)のR. A. ロックも関係する「Joice Heth」事件²²⁾もこの頃の事である。

黒人老婆Joice Hethはワシントン(1732-1797)の乳母という振れ込みで、1835年8月で161歳だといってバーナムが見せ物にした。残念ながら、この老婆はすぐ死んでしまった。その解剖結果から、たかだか80歳程度であると、ロックが1836年2月27日紐育「Sun」紙上で暴露したのである。

この物語はいろいろ尾を引くから省略するが、ポオの生きた時代を象徴するものといえよう。1836年はまた「Alamoの砦」の年で、若いアメリカ

は西部に向って拡張を続けていた。活発といえば活発であるが、インチキ「patent medicine」やバーナムの「hoax」の泥絵具にあくどく彩どられた猥雑な世紀でもあったのである。

そしてブレイディ写真館は大成功であった。

「米国には現在一万人の銀板写真家がいるが、この中の leading one といえばブレイディ」²³⁾ というのがその賛辞であり、彼の如才のない社交性がまたこれを助けたのは言うまでもない。

後年のことになるが、1860 年 2 月 Cooper Union 演説会に紐育入りしたリンカーンの写真を撮ったのも彼である。このころのリンカーンは髭がなく「half-alligator, half-horse」²⁴⁾ だったという。ブレイディの撮影した肖像写真はリンカーンの大統領就任に大きく貢献した。これはリンカーン自身が言っているから間違いない。ブレイディはリンカーンに気に入られ、彼が大統領になってからでもその写真を撮り続け、「Mr. Lincoln's Camera Man」と異名をとるほどになった。

リンカーン以外にも著名人がその写真館を訪れることでも知られ、これがさらに彼の写真館を有名にすることになった。

「ブレイディが君の写真を撮りたいといって来たら君がニュースになったことを意味する。悪名高いか、面白いのか、ただ有名であればよい。君が善良か偉大かなどは二の次ぎだ」²⁵⁾

このブレイディ写真館にポオが友人と共に訪ねて来た。1849 年（嘉永 2 年）5 月、ポオの死の 5 ヶ月前のことである。R. Meredith, *Mr. Lincoln's Camera Man*²⁶⁾ によるとその模様は次のようであった。

「Edgar Allan ポオがこの年（1849 年）5 月末に不意にやって来た。友人と一緒に、それは詩人の R. ウォレス（Ross Wallace）である。ウォレスは自分の写真を注文し、代金は自分が払うといった。彼はまたブレイディにポオを紹介した。ブレイディが珍客をお迎えできて光榮だといったのは当然である。

ポオは憂鬱そうに見えた。見るからに何かを病み、心の痛みを耐えてい

る様子だった。そしてひどく貧乏なことは、身なりからもわかった。よれよれの黒い服を着ていて、ボタンを窮屈に上から下まで掛けているものだから、痩せ細った身体が余計に目立つ。

シャツは外から見えない。幅広い、くしゃくしゃの黒のネクタイが、無造作にぐるぐると何回も首のまわりに巻いてあるので、まるで「骨折の包帯」のようである。

手入れの悪い長い髪の毛は、ポオの襟まで覆い、耳にかぶさっていた。ちょうど2年前、最愛の妻を失った癒やし切れない悲愁がその暗い瞳に翳をおとしていた。蒼い顔は性格的だが、眼のまわりはややたるみ、そこが黔ずんでいるのは過度の飲酒のせいだろう。

助手がウォレスを撮る準備をしている間、ポオはカメラの横に立ちその操作を好奇の目で見守っていたが、その間じゅうあまりに無口なのが奇妙な感じであった。

ブレイディはウォレスの写真を自分の満足のゆくまで数枚とってから、ポオに向って写真を撮りませんかと誘ってみた。ポオはかすかに笑ったが、首を横に振り、それと共にくしゃくしゃの髪も揺れた。もちろんブレイディがこの素気ない断りの理由を悟らない訳がない。外交辞令の限りをくり出して、お金は戴かない、ポオ芸術の崇拝者の一人として写真を写真館に飾らせてほしいのだということをポオに納得させようと努めた。

しかし無一文のポオは断り続けた。

とうとうウォレスが仲に入って、ポオも折れ、カメラの前に座ってくれた。無造作でネクタイに手をやることもしなかった。

ブレイディの出すポーズの注文には素直に応じてくれたが、その表情は最後まで暗いままであった。撮影が済んで、銀板が処理されている間にブレイディはウォレスとポオをギャラリーに案内して、壁に掛かっている著名人の写真をあれこれ指さして教えた。

それから、すぐ彼等は帰った。そしてポオは二度と来ることがなかった。」

Meredith の本には特にそうと断ってはいないが、この時の写真らしいものが「モヒカン族の最後」などの著者、冒険作家の Fenimore Cooper らの写真と共に掲載されている(図1)。²⁷⁾しかし、これはその描線から銀板写真をもとにして銅版に彫ったものであることは明らかである。そして銅版画(図1)に見る襟の合せ方は左前であって、このポオ肖像は銀板写真特有の左右逆像(鏡像)になっている。ここで襟の左前というのは着せる人から見て、左手で掴む方の襟が上に重ねてある着方のことである。この定義によると現代の男子背広の着方は右前である。

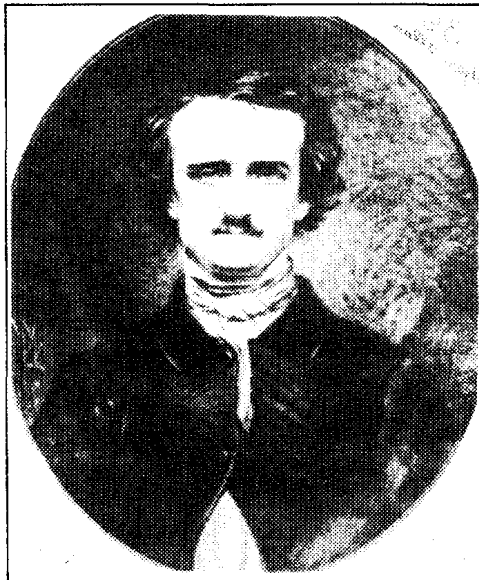


図1. ポオ鏡像

R. Meredith

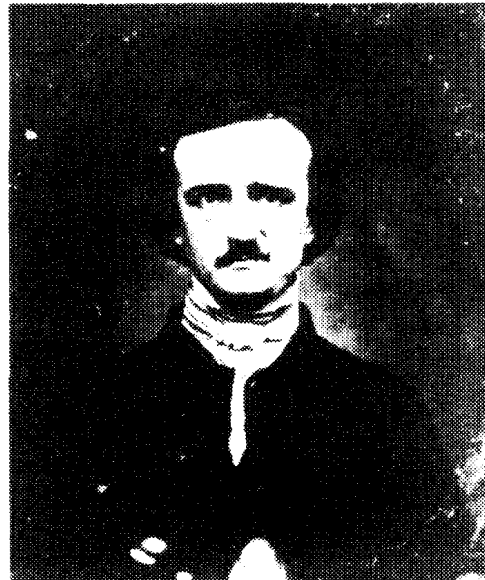
Mr. Lincoln's Camera Man

図2. ポオ正像

B. Newhall

The Daguerreotype in America

ところがこの図1をよく観察すると、右肩の「dgar allan」という文字は裏から見たもので、鏡像であることがわかる。すなわち、この図1の銅版画はもともと正像であったものを、銀板写真の原版らしく見せるために、わざわざ裏返しに焼き付けて左右逆像にしたものと見える。おそらく著者はブレイディ写真館でのポオ原板が発見できず、手近にあった正像の銅版画を裏返しにして使用したと推定される。

しかも、この原板がブレイディ写真館のものでないことは、別に1848年 Manchester 兄弟のところで撮ったとされる銀板写真(図2)との比較でもわかる。

この写真は B. Newhall, *The Daguerreotype in America* ²⁸⁾にあるもので、大きさは quarter plate ($3\frac{1}{4} \times 4\frac{1}{4}$ インチ, 8×11 cm) とある。Henry と Edwin の Manchester 兄弟²⁹⁾は 1848-1860 年 Rhode Island 州, Providence で開業していた。そのころ、よくここを訪問していたポオが兄弟の写真館に寄ったのであろう。

襟の合せ方から見て、図 2 は正像であるが、はじめの原板から正像であったのかどうかは記載がないから不明である。レンズの前に鏡やプリズムをおいて写せば正像に写る。しかし風景写真以外にはこの方法はあまり行っていない。ついでであるが Newhall の本所載の銀板肖像写真の約半数は正像である。

図 1 と図 2 を比較して見ると、ブレイディ作と称する図 1 は図 2 を原画として作製した銅版画で、しかもそれを銀板写真らしく見せるために、裏返したものであることにほぼ間違いないように思える。

図 2 のポオ肖像写真はひどく左右非対称であって、いかにも「アッシャー家の崩壊」などの怪奇小説作家の外貌にぴったりだというのでよく引用される写真である。

たとえば The Beatles 「Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band」³⁰⁾ のジャケットにもある。このジャケットの背景は有名人の顔を集めて構成しているが、Marilyn Monroe の上、最後列にのぞいているのがこの顔である。

Bernal, Hamilton, Ricci, *Symmetry* ³¹⁾は、図 2 の顔を左右二つに切って、それぞれの半分から左右相称のポオ像を構成している。向って左側だけで作った顔は、眉の上がった意志の強そうな顔になるのに、反対の右側だけから構成した顔は、眉が下がっていて意志薄弱のペテン師の顔になるから不思議である。ポオの性格や作品にうかがえる二面性が、この左右像に具象化されているともいえよう。

銀板写真と、その左右逆像の出て来たところで、この時代の銀板写真の撮影を説明しておこう。³²⁾ 銅板を銀メッキしてその銀面を磨く。次にその面を下にしてヨウ素結晶の入った箱の上にのせてヨウ素蒸気に触れさせ

る。十分間ほどであるが、これで黄金色のヨウ化銀が表面にできる。これが感光剤である。ブレイディのころには臭素を加えて感光性を上げていた。できた銀板を取枠に入れてカメラに仕込み露出をする。

ポオのころはスタジオの中で 15 秒ぐらいの露出になっていたはずである。この後の現像のところがダゲレオタイプ技法の核心である。箱の中に水銀を少量入れて、これをアルコール燈で 75℃ に熱しておく。この中に露光した銀板を入れて 5 分間ほど水銀蒸気に触れさせる。ヨウ化銀が光に当たって銀粒子になったところに、水銀が合金（アマルガム）となって沈着する。そして、ここが白く見える。光が当たった明るいところが白くなるのであるから、そのまま陽画として見られるのである。あとは影の部分に対応する、光の当らなかったヨウ化銀のところをこれ以上、感光しないように除かねばならない。ダゲールの初期の処法ではここで濃食塩水を用いたが、後ですぐ現在のようにハイポを使用することにした。ダゲールのころは、ここ迄であったが、そのあと塩化金水溶液を用いる gilding 鍍金処理が加わった。影の銀粒子のところに金が沈着してより黒くなり、美しいコントラストを与える。そのうえ、これが脆い銀板の映像をかなり丈夫にすることに役立った。

出来た銀板写真を金属の装飾枠でかざり、ガラス板で保護して皮張りケースに入れると出来上りである。

ポオの時代は大きさにもよるが、ふつうの銀板写真で 5-10 ドルしたというから高価である。1844 年 4 月妻のヴァージニアと共にフィラデルフィアを引き払って紐育にやって来たとき、ポオの財布には 4 ドル 50 セントしか入ってなかったという。紐育でも最高級のブレイディ写真館の写真代が払えるわけがない。

次に銀板写真の左右性を考えてみよう。「銀板」はガラスと違って裏から見るができない。見るのはレンズからの光線のあたった感光面からである。この面が鏡面になるからダゲレオタイプで見えるのは鏡像ということになる。ところが鏡像の写真を見ても、ふだんわれわれが見慣れているのは鏡に映った自分の姿、すなわち鏡像（左右逆像）であるから、それ

ほど奇異に感じない。その上に、人間の顔はほぼ左右相称だから鏡像も実像とそう差がないのである。

ただ風景では左右が変わると、見慣れた風景が全く別に見えるから困る。とくに看板は文字が反対になって余計に奇異な感じを与える。こんな時にはレンズの前にプリズムをおいたり、鏡をおいて撮影して正像に映すのが普通であった。もちろん、この分だけ露出を長くしなければならないが、人物と違って動かない風景写真では、明るい戸外のことであっても、これは問題にならない。

この銀板写真における左右問題で有名なのは、襟が左前に描いてある川路聖謨像である。川路左衛門尉「下田日記」³³⁾には写真をとる場面が書いてある。安政元年(1845)12月24日の記事で、写真を撮ったのはプーチャチン艦隊のモジャイスキー海軍大尉であった。露出は5分ぐらいだったという。できた銀板写真をもとにして、モジャイスキー大尉の模写した画が東洋文庫「長崎日記・下田日記」の口絵になっている。修正してないから、当然に襟は左前となっているが、その説明に「左前に着ているのは死装束であることを示す」³⁴⁾とある。もちろん誤りである。

万延元年(1860)遣米使節のころは、ほとんどガラス板にコロジオン液を使う湿板写真であった。

これは現像、定着のあと「アンブロタイプ」というガラス写真にするか、印画紙に焼き付けたから左右正像となる。しかし銀板写真も完全に消滅しているわけでないので、左右逆像に写ることもあった。

加藤素毛「亜行航海日記」³⁵⁾によると桑港で撮った写真はみな左前になった。「それゆえ此所(ワシントン)にては衣服大小まで右に帯して向うたり」とあって、右腰に大小を差し椅子に腰かけてカメラに向っているスケッチを残している。素毛はわざわざ銀板写真を注文したのであろう。

銀板写真は、その粒子の細かさと精緻な工芸的美しさに優れた特質をもっている。そのうえ微妙な諧調の表現は滑かな金属光沢と相俟って、工芸品という点では「紙焼き写真」をはるかに凌駕していた。日本への土産物としては、この方が好まれたものと思われる。

4. 晩年のポオ肖像写真と「左右問題」

ポオは 1849 年（嘉永 2 年）10 月 7 日に死亡する。晩年といっても 40 歳そこそこである。そして、これから紹介するポオの肖像写真は、すべて妻ヴァージニアの死、1847 年 1 月 30 日からの 3 年間に集中している。

27 歳のポオと結婚したとき従姉妹のヴァージニアは 14 歳であった。この妻が赤貧の中、結核で死んだのである。まだ 24 歳でしかない。4 ドル 50 セントを持って紐育に出て来てから 4 年目である。ヴァージニアが死んでからのポオの行動は、糸の切れた凧のようにどこか「erratic」である。

飲酒のせいもあるだろうが、身体の欠陥に耐えているところがあるのではないかを疑わせる。ブレイディが写真を撮ったときに観察したのもそれであろう。自身でも「頭の中のどこかがおかしい」と手紙に書いている。

女性から女性へと遍歴をする。それも「passion」に駆られてというより、庇護を求めてというところがある。

もともとポオの性格には女性（母性というほうが正しいかもしれない）の賞讃と保護の中に浸りたいという欲望が濃く認められる。

旅役者の母がリッチモンドで死んだので、6 歳のポオは貿易商 John Allan の家に引きとられた。Edgar Allan の Allan である。子供がないアラン夫人はポオを甘やかした。これがそもそも「spoil」のはじめである。この夫人もポオが 20 歳のときに死亡した。そのあと 7 年して 14 歳のヴァージニアと結婚するのも、彼女の母でポオの父方の叔母にあたるクレム（Clemm）夫人の強い性格に惹かれた節がある。

ポオの伝記といっても私は J. A. Harrison, *The Complete Works of Edgar Allan Poe* いわゆる *Virginia* 版（1902 年）第一巻³⁶⁾の「Biography」1 冊を参考にしているだけである。ポオの伝記には日本語のものでも広範なのが数多くあり、本国アメリカでのポオ伝記研究書はそれこそ汗牛充棟の形容がそのまま当てはまるほどあるのだろう。そこで詳しいことは、これらに譲って、ここではポオの晩年の写真の説明に関係のある、数人の女性のリストのようなものを挙げるにとどめよう。

まず Marie Louise Shew 夫人がいる。この人は紐育の有名な医師の娘で看護の心得があり、ヴァージニアの死を看取った。ヴァージニアは藁のベットに横たわり、厳寒だというのに掛けてあるのは、夫のオーバーだけだったという。そして暖を助けるのは大きな猫一匹という悲惨さである。

この夫人はヴァージニア亡きあとも援助の手を差しのべてくれた。詩「To M. L. S.」「To — — —」はこの人に捧げられたものである。有名な「The Bells」も Shew 夫人の家で発想を得たという。しかし Shew 夫人もポオがあまりしげしげ来るといので避けるようになった。

次に Sarah Helen Whitman 夫人がいる。夫人は45歳の未亡人で Rhode Island 州, Providence のちょっとした女詩人である。ポオはこの人との出会いに「運命」を感じたと告白している。

「I yielded at once to an overwhelming of Fatality」

これは「Helen」という夫人の名前からである。

まだリッチモンドに居たとき、14歳のポオは友人の母 Jane Stith Starnard 夫人に夢中になってしまう。そして「Jane」という名前を嫌って自分で「Helen」ということにした。ところが、この夫人が次の年1824年に気が狂って死んでしまったのである。後年の美しい詩「To Helen」はこの人を歌ったものである。

Whitman 夫人に結婚を申し込んだが、直ぐには承諾しない。ポオの「erratic」は行動を警戒して、周りの人が夫人に忠告しているからである。

同じころ、今度はマサチューセット州, Lowell の Annie Richmond 夫人にも近づいている。「For Annie」という詩は、この人の為のものであるという。

ポオの死後、一人になったクレム夫人の世話をしたのはこの人である。

ポオは死んでからの方が多くの人びとに慕われている。

こうして1848年夏ごろのポオは「Helen」と「Annie」の間を揺れていた。

図3は Harrison, *Virginia* 版, 第15巻の口絵で、説明に「Sarah Helen Whitman のために撮った銀板写真」とある。これは襟の合せ工合から見

て正像である。これと同じ写真は野口米次郎「E. A. Poe」⁵²⁾の巻頭口絵にもなっている。ところが、この原板と考えられる鏡像のものが Brown 大



図 3. ポオ正像

Harrison, *Virginia* 版, 第15巻



図 4. ポオ鏡像

Mabbott, 第3巻

学図書館にある(図4)。Mabbott, *Collected Works of Edgar Allan Poe*, 第3巻³⁷⁾の口絵に載せるもので、その説明によると1848年11月14日 Providence の Market Street 25 番地, Hartshorn 写真館で撮り、その日に Whitman 夫人に贈ったものだという。大きさは sixth plate ($2\frac{3}{4} \times 3\frac{1}{4}$ インチ, 7×8 cm) で銀板写真特有の「a mirror image of its subject」になっていると書いてある。私の見た限りのポオ肖像写真で、この点を明確に記述しているのはこの一枚だけである。

図4と同じ写真はまた写真史家 Gernsheim 夫妻, *L. J. M. Daguerre*³⁸⁾, 図版 63 にもある。ここでの説明は「1848 年 S. W. Hartshorn 撮影」となっている。Newhall の本³⁹⁾によると、S. W. でなく W. S. Hartshorn は 1848 年頃 Rhode Island 州, Providence で開業していて、1850 年には店を Manchester 兄弟に売ったという。この兄弟は図2を撮った人である。すると、この時分小さな Providence の町に少くとも二軒の写真屋があったことになる。

Whitman 夫人とは酒を飲まないという約束で、やっと婚約にまで漕ぎつけたのに、約束を破って式の前の晩に破約になってしまった。

図5, 図6 はやはりこの頃の肖像である。図5は Harrison, *Virginia* 版, 第4巻, 図6は第16巻の巻頭口絵となっている。



図5. ポオ正像
Harrison, *Virginia* 版, 第4巻

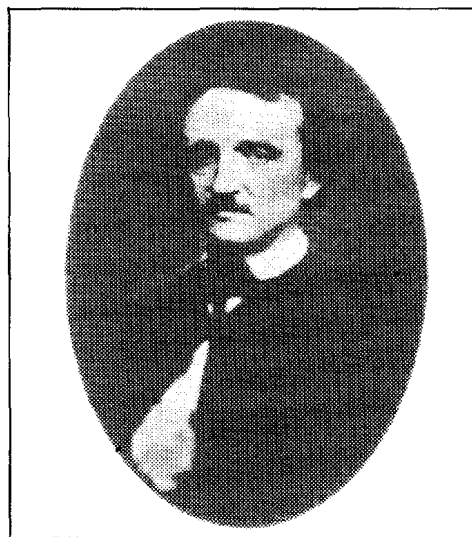


図6. ポオ鏡像
Harrison, *Virginia* 版, 第16巻

図5は説明によると, リッチモンド市 Main Street の Whitehurst 写真館で撮った写真をもとにした「Davidson portrait」であるという。

Newhall の本⁴⁰⁾には Jesse H. Whitehurst は1820年生れで, この頃リッチモンド市で営業していた写真家と書いてある。

「Davidson portrait」というのは, 恐らく銀板写真から肖像画を作った画家のことをいうのであろう。これは正像である。絵にするときには銀板写真の鏡像を正像に描き換えたのに相違ない。この絵からポオが右利きであることがわかる。同じことは髪分け方や, 筆跡からも推定できる。

Mabbott, 第3巻の巻末にはポオの自筆原稿の写真版がある。未完だがポオ恐怖小説の最後のものになった「The Light House」の原稿で, 右手で書いた特徴が良く現われている。整然とした美しい筆跡を見ると「erratic」なはずのポオが, どうしてこう素直で整った字が書けるのか不思議な気がする。ポオの別の一面を覗き見たという感慨に打たれるのである。

この「Davidson portrait」の原板が図6であろう。これは鏡像である。説明には「1848-1849年の銀板写真より」とある。これからこの銀板写真(図6)が上の Whitehurst 写真館で撮ったものであると推定できる。

ただ図6には銀板写真を紙写真にして修整したような跡がある。この写真は、はじめ養父 John Allan の息子の一人の手にあったのだという。養父 Allan は再婚で子供を儲けたのである。



図7. ポオ鏡像

Harrison, *Virginia* 版, 第5巻

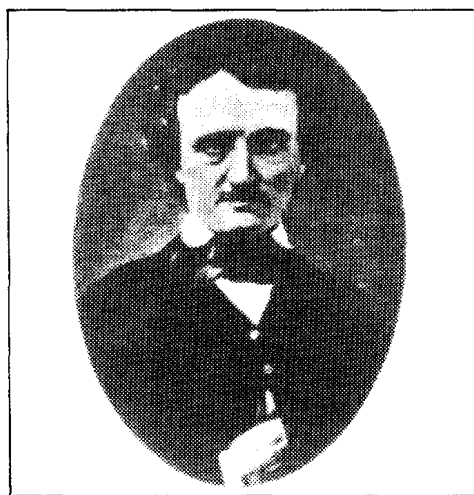


図8. ポオ鏡像

Harrison, *Virginia* 版, 第17巻

図7は Harrison, *Virginia* 版, 第5巻の巻頭口絵で、説明には「Oscar Halling portrait」とある。これは絵であるが、鏡像になっている。表情などから見ると、写生した原板は Whitehurst 写真館での写真(図6)だろうと推定される。

最後の一枚の肖像(図8)は珍らしく正面を向いている。世界文学大系「ポオ・ボオドレール」⁴¹⁾の口絵は、輪郭はもっとはっきりしているものの、この図とほとんど同じである。

この図8は Harrison, *Virginia* 版, 第17巻の巻頭口絵であって、ボタンのかけ方、髪分け方、向って左の眉の下がっている特徴などから鏡像であるのは確かである。説明には「Stella の持っていた銀板写真より」とある。絵なのであろう。「Stella」は紐育の S. A. Lewis 夫人である。

ポオは最後の年、1849年6月に長年の夢であった自分の雑誌「The Stylus」をイリノイ州の E. H. N. Patterson の後援で発刊するつもりで紐育を去りリッチモンドに向った。そのとき50ドルを前借した。この金はリッチモンドで受け取っている。

紐育を発つときポオは「Stella」に向って、もし自分が2度と帰って来なかったら伝記を書いてくれと頼んでいる。リッチモンドには7月に着いた。久し振りの郷里の人びとは温く彼を迎えてくれたが、彼はここでまた「erratic」になる。

かつての恋人 Sarah Elmira Royster, 現在の金持の未亡人 Shelton 夫人に再会して結婚の約束をしてしまう。そして9月27日クレム夫人を紐育に迎えに行くつもりで出発するのだが、10月3日意識のない状態で発見されたのはフィラデルフィアの酒場の前であった。そして4日の後に息を引きとった。

図8の説明はまだあって、この写真は Gabriel Harrison がクレム夫人に送った手紙の中で言っている写真だろうという。

手紙は Harrison, Virginia 版, 第17巻「書簡集」にある。ポオの死後16年も経った1865年1月31日付のものである。この手紙で彼女はポオのことを「Eddie」、クレム夫人を「Muddie」と呼んでいる。「私は彼のちゃんとした肖像を残したい。私はEddieの銀板写真を一枚もっている。これは1849年に私の覚えていた彼にもっとも近い。」これをもとにして水彩画を描いて「Historical Society」に寄贈するつもりである。だから「Muddie」よ彼の眼、髪、肌の色など正確に教えてほしい。彼の眼は「dreamly hazel color」ではなかったか。

この水彩画は現在「Brooklyn Historical Society」の所蔵だそうである。世界文学大系「ポオ・ボオドレール」の原画はこの水彩画なのかも知れない。

クレム夫人は、このあと6年苦渋に満ちた生を続け、1871年2月17日ボルチモアの施療院で死んだ。そしてポオとヴァージニアの眠っているボルチモア Westminster 長老教会の墓地に葬られた。

夫に手を取られ、母に足を温めてもらいながらヴァージニアが息を引きとった紐育郊外 Fordham の家は現在「ポオ公園」になっている。

お わ り に

ここで述べて来たポオ肖像写真の「左右逆転」の例は銀板写真時代のことである。銀板写真の米国での最盛期は 1855 年頃までで、次第に湿板写真にとって変られた。1851 年（嘉永 4 年）3 月に F. S. アーチャー（F. Scott Archer）が発表したコロジオン法が主流になって来たのである。この方法ではガラス表面に感光剤が載ることになるが、撮影、現像、定着とすべて感光剤の湿った状態で操作しなければならない。湿板法（wet process）と呼ばれる理由である。

これが現在のゼラチンを媒体とする「乾板写真」に進歩した。

「湿板」にせよ「乾板」にせよ、先ず白黒反対の陰画（ネガ）ができる。これを元にして印画紙に焼き付けたり、引伸しをして陽画（ポジ）を作る。このとき両方の感光面が向い合うようにしなければ左右逆転の陽画ができてくる。

この結果もともと左右逆転の銀板写真が、現在の乾板写真に進化してからでも、左右逆転の機会が発生することになった。これが左右逆転の肖像や絵画の写真が今でも多数発見される理由である。例を挙げるときりがなが、参考のために身近な二三の例⁴²⁾を紹介しよう。

ゴッホ（Van Gogh）の「花魁（おいらん）」図が、もっとも有名であろう⁴³⁾。これは江戸末期の浮世絵師溪斎英泉の版画「花魁」⁴⁴⁾の油絵模写である。

ところがゴッホの絵は英泉の原画の鏡像になっていて、英泉の版画では向って右を向いている「花魁」がゴッホ模写では左を向いている。

英泉「花魁」図は「タンギー爺さん」の⁴⁵⁾背景にもあるが、これも鏡像である。この頃は Japonisme（日本趣味）流行時代で、印象派の画家たちは競って Japonaiserie（日本美術品）に関心を持ち、版画の模写などをしていく。ゴッホは英泉「花魁」のほかにも、広重「名所江戸百景」の中から「大はしあたけの夕立」⁴⁶⁾「亀戸梅屋舗」⁴⁷⁾の模写をしているが、⁴⁸⁾ これらはいずれも原画どおり正像である。

ゴッホの「花魁」図は、明治19年(1886)5月刊「*Paris Illustéré de Japon*」という日本特集号に載った絵を模写したものである。林 忠正が編集したもので、彼は日本の版画をパリで売っていた。日本特集号は3万部近く売れたという。英泉「花魁」は、この特集号で鏡像にされていたのである。

ゴッホはそれとも知らず、油引きの方眼紙を使って丹念に模写をしている。「*Paris Illustéré*」で鏡像になったのは、おそらくグラビア写真製版の段階で、日本文字の左右などを知らないパリの職工が無造作に陰画を反対向けにして焼き付けたからであろう。

紐育の Dover 出版社も不思議と写真の左右逆転に無関心のようなのである。この出版社はいろんな古典の複製版を作ってくれていて、私などは便利に利用させて貰っているが、表紙に多く写真を利用しているのが特徴である。

ところが故意にそうするのかどうか知らないが、その多くが左右逆像になっている。たとえば有名な T. W. Webb, *Celestial Objects for Common Telescopes*⁴⁹⁾ の表紙絵がその例である。これは表紙絵に月の望遠写真を使っている。私は最初に見たとき、あまりにも見慣れない月表面だから月の裏側の写真を利用したのかと疑ったぐらいである。まさかと思いながら鏡に映してみると、「雲の海」(Mare Nubium) 付近の風景が浮び上がって来た。鏡像だったのである。

もっとひどいのは Dover 版「パストゥール伝」⁵⁰⁾ の表紙絵であろう。明治22年(1889)パストゥール67歳の肖像写真であるが、左右逆転している。

この時分は彼の若い時の銀板写真と違って、フランスでは乾板を使っていたはずであるから、原画は左右正像に違いない。現に正像の方の写真は同じこの本の口絵になっている。こうして、この「パストゥール伝」では結果的に扉ページが鏡面になって、これを挟んでパストゥールの実像と鏡像が背中合わせに配置されているという珍しい形を呈することになった。乱暴といえば乱暴だが考えようによっては、これも分子の世界に左と右の

鏡像同士のものがあることを発見した、パストゥールの伝記には相応しいことかも知れないのである。

文 献

- 1) 「適塾」第 18 号, 適塾記念会, 昭和 60 年 12 月, p54.
- 2) 後年のパストゥールの肖像のすべてが厳しい表情になっている理由の一つは、彼が 46 歳 (1868 年) のとき脳出血で左半身不随となり、右顔面の表情を失ったためとされている。
- 3) Pasteur Vallery-Radot, *Correspondance de Pasteur*, Vol. 1, Flammarion, Paris, 1940.
- 4) 中京大学「教養論叢」第 26 巻, 第 3 号, 中京大学学術研究会, 1985, p1.
- 5) Helmut and Alison Gernsheim, *L. J. M. Daguerre*, Dover Pub. Inc., New York, 1968.
- 6) 谷口博保, 写真工業, 40 (9) 35, 40 (10) 29 (1982).
- 7) 谷口博保, 写真工業, 40 (2) 81, 40 (3) 98 (1982).
- 8) 銀板写真の化学については次の本によった。J. M. Eder (E. Epstein 訳), *History of Photography*, Dover Pub. Inc., New York, 1978.
- 9) 文献 5, p95.
- 10) R. Taft, *Photography and the American Scene - A Social History*, 1839 - 1889, Dover Pub. Inc., New York, 1964, p11.
- 11) 文献 5, p198. B. Newhall による詳細な書誌がある。
- 12) D. Malone Ed., *Dictionary of American Biography*, Vol. 7, Charles Scribner's Sons, New York, p247.
- 13) B. ジャッフィ著, 島村道彦訳, 「アメリカの科学者たち」創元社, 昭和 29 年 1 月, p161.
- 14) B. Newhall, *The Daguerreotype in America*, Dover Pub. Inc., New York, 1976, p21.
- 15) 文献 12, Vol. 3, p439. この中にはモースが写真に興味を持ってフランスに習いに行ったとあるが、これは誤りである。
- 16) この写真は文献 10, p22 にある。ドレイバーはこれを J. Herschel に送り、1893 年シカゴ万国博覧会の際英国から帰って来て展示された。1933 年に写真に撮られたものが残っているが、不注意に原板に触れたものが現在では原版そのものに像を見ることができない。
- 17) 文献 1 に詳しい。
- 18) 文献 12, Vol. 1, p584.
- 19) R. Meredith, *Mr. Lincoln's Camera Man, Mathew B. Brady*, Dover

- Pub. Inc., New York, 1974, p1.
- 20) 文献 12, Vol. 1, p636.
- 21) C. D. MacDougal, *Hoaxes*, Dover Pub. Inc., New York, 1958, p138. 「the public likes to be humbuged」
- 22) 文献 21, p139.
- 23) 文献 19, p30.
- 24) 文献 10, p194.
- 25) 文献 5, p141.
- 26) 文献 19, p30.
- 27) 文献 19, p33, 図版 20.
- 28) 文献 14, 図版 62.
- 29) 文献 14, p148.
- 30) The Beatles 「*Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band*」 Apple Records, Stereo - EAS - 80558, 1967 年 6 月.
- 31) I. Bernal, W. C. Hamilton, J. S. Ricci, *Symmetry, A Stereoscopic Guide for Chemists*, W. H. Freeman & Co., San Francisco, California, 1972, p10.
- 32) 文献 1, p57.
- 33) 川路聖謨著, 藤井貞文, 川田貞夫校注「長崎日記・下田日記」(東洋文庫) 平凡社, 1968 年 10 月, p196. 新しい版ではこの死装束の説明は削ってある。
- 34) この左右問題は次の本に詳しい。大南勝彦「ペテルブルグからの黒船」(角川選書) 角川書店, 昭和 54 年 1 月。
- 35) 「万延元年遣米使節史料集成」第 7 巻, 風間書房, 昭和 36 年 9 月, p210.
- 36) J. A. Harrison, *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, AMS Press. Inc., New York, 1965.
- 37) T. O. Mabbott, *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. 3, Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, 1978.
- 38) 文献 5, 図版 63.
- 39) 文献 14, p146.
- 40) 文献 14, p155.
- 41) 「世界文学大系」第 33 巻「ポオ・ボオドレー」筑摩書房, 1959 年 7 月.
- 42) 新聞記事になったものまでである。これは C. ダーウィン (Charles Darwin) の乗ったビーグル号 (Beagle) がマゼラン海峡の近く, *Tierra del Fuego* を航海している図である。日本で翻訳刊行された二つの本の挿絵が鏡像同士になっていたというのである。朝日新聞, 1982 年 12 月 19 日 夕刊。
- 43) 「現代世界美術全集」第 8 巻「ゴッホ」集英社, 1970 年 12 月, 図版 15.
- 44) 「浮世絵大系」第 10 巻「国貞, 国芳, 英泉」集英社, 昭和 54 年 4 月, p133.
- 45) 「世界の名画」第 11 巻「Van Gogh」中央公論社, 昭和 48 年 11 月, 図版 1.

- 46) 「浮世絵大系」第 16 巻「名所江戸百景 (1)」集英社, 昭和 51 年 9 月, 図版 52.
- 47) 文献 46, 図版 30.
- 48) 文献 45, 図版 28 「千住大橋の雨」 (原色版).
- 49) T. W. Webb, *Celestial Objects for Common Telescopes*, Dover Pub. Inc., New York, 1962.
- 50) René Vallery – Pasteur (R. L. Devonshire 訳), *The Life of Pasteur*, Dover Pub. Inc., New York, 1960.
- 51) ドレーパーはアメリカ化学会の初代会長 (1876 年) である。彼は多方面な人で科学以外の著作に「*History of the American Civil War*」 (3 巻, 1867-70 年) がある。また「*History of the Conflict between Religion and Science*」 (1874 年) は有名で, 9 ヶ国語に翻訳された (平田 寛訳「宗教と科学の闘争史」社会思想社, 昭和 53 年 9 月)。この本はローマ正教の禁書リスト (Index Ex-purgatorius) に入っている。
- 52) 野口米次郎「ボオ」研究社英米文学評伝叢書第 93 巻, 研究社, 昭和 9 年 10 月 (昭和 55 年 6 月復刻)。